

日本人集団のDNAの、近年のオンvsオフ症状

——大危機を脱出するヒントを求めて——

森 一久

人類が、日本が、産業革命以来のこの大危機を、何とか地獄を見ないで克服出来るとすれば、何百世紀以来の祖先から伝えられ我々の細胞内にあるはずの、大きな知恵（DNA）の目覚めに期待するほかなしということ、本ブログ3/9で訴えた。人類の祖先は、仮に脊椎動物まで遡っても五億年、以来海に潜って放射能をやり過したり、恐竜時代には小さな体で生き残り、（おそらく）大隕石の地球への衝突という惨事にも同じ理由で生き残り、数千万年前に「哺乳類」に辿り着いた。その間の波乱万丈、偶然・幸運の膨大な「経験」への対応の集積は、少なくとも部分的に、種々の仕組みで我々人類のDNAの中に存在していて、いざという時目を覚まして、事態の打開（すなわち種の保存）に当たり、その或る仕組みは、その「種」の特技・特性として存続しているわけであろう。

ここで急に、突飛な事例を挙げるのは素人の故と勘弁願うが、衰えた柿の木の幹に、多数の傷をつけると、翌年実の数が急増するなどというのは割りに知られている。話は変わるが、人の卵子が受精して卵管を下降する直前の段階での性比（男女の比率）を調べた奇妙な医師が、「男の方が数倍」と発表したことがある。男の胎児は睾丸が納まりにくいとか、育ちにくいとか、複雑怪奇な過程の結果だが、ともかく人間の成人の男女比がほぼ一に保たれているという「神秘」、が回りまわって、こんな神秘的な仕組みに支えられているとは！・・・「見えざる手」が長い間にDNAのOn/Offを駆使して作り上げたシステムの一つの例であることは間違いない。

さて目下の深刻な事態、特に日本が世界で最も大きな打撃を受け続けているのは、日本人が全体として、事態の予見能力が他国に比し低下していたことを意味する。ここで戦後の、いわば国民一丸になっての経済復興を成し遂げてから後の、日本人の精神状況（或いは精神の「位置」は）平均的にどう変貌してきたか、を大まかに顧みてみよう。

やはり「巨人—大鵬—玉子焼き」という言葉が流行し、日本人の平均的価値基準が統一された時期が、大きな変曲点であった。昔から日本でも、「勝てば官軍」とか「寄らば大樹の陰」とか、「長いものに巻かれる」といった格言や知恵は存在してきたが、それらは一時しのぎの（止むを得ない）「手段」という惻隠の情が常に一緒にあった。一方「判官びいき」という敗者・弱者への思いは、日本精神に連綿と続いてきた。

しかしながら日本は、万博・オリンピックを終え、経済大国など言われ、日米安保がいつの間にか「日米同盟」という言葉に格上げ（？）され、日本のODAは世界一などといわれた頃から、日本人は偉くなってしまったのであろうか。そして、「毒を食わば皿まで」の、強者への依存と憧憬に染まってしまったのであろうか。

最も確実な回復の手段といえば、それは、トコトンまで堕ちることであるのは歴史の証明するところである。

「そんな無茶な」と言われそうだが、古くは聖徳太子が身を挺して、国家としての日本の原型を創ったのは、将に大陸の大国に滅亡される危機寸前のことであつた（ことが最近判明し

た)。それから約七百年後、武士たちが群雄割拠の果てに殺し合いが目的化し、遂に鴨川が屍骸で埋まる「応仁の乱」。日本人は一つの国家として生きる希望さえも失いかけた。このとき日本人が辛うじて精神的アイデンティティを保ちえたのは、蓮如らの革新的宗教家の登場であつた。

それから皮肉にもまた七百年を経た今回、日本人が金に眼が眩み、（仮に）強肉弱食の果てにゼネスト続発で社会が血で血を洗う混乱・・・という風に展開しておれば、一体どうなっていたであろうか。

この思考実験の意義は別として、私は前二回の国家危機のように行かないと思う。と言うのは、今の日本人の精神構造は相当に病んでいて、「無宗教」といわれる状況に追い込まれている。だから、精神改革がきっかけになるとは思えないからである。

従って日本が今の状況に堕ちてきた「要因」は単純でなく、緻密な分析が必須だと思う。

先ずなんと言っても、「ITと日本」である。IT時代の到来で、単民族といわれ鎖国時代も長かった日本人は、過去最大の心身への衝撃を受けつつある。そのITの影響が、精神的また社会的には、日本全体を無秩序無原則なものに変えて来たと思う。

（つづく）

[このページを印刷する](#)

[トップページへ戻る](#)

UCN会